

【書評】

増田樹郎、山本誠編者 シリーズ介護の世界 第1巻

解く 介護の思想 —なぜ人は介護をするのか—

(A5判 151ページ 1,800円(本体) 2004年 久美株式会社)

佐々木敏明

聖隷クリストファー大学

Toshiaki SASAKI

Seirei Christopher College

少子高齢社会の到来は、介護の責任を家族に負わせるいわゆる「日本型福祉」から、介護の社会化への転換を促し、これを業（専門職）として行う介護福祉士が誕生することになった。しかし、評者は、家族愛にすりかえるような発言も論外であると思うが、介護が単なる「負担」としてとらえられ、介護行為が「ADL」に限定されて、技術として切り売りされる傾向には、介護の価値や大切な働きが見失われているのではないかという疑念を持っている。

本書は、介護の世界シリーズ3巻の第1巻として、介護の概念を学際的な視点から、「なぜ人は介護するのか」と問いかけ、介護の拠って立つ足場を考えるという、あまり類書のない試みである。

本書は9編の論文によって構成されている。

Chapter1『コミュニケーションとしての介護者』では、八木誠一氏（新約聖書学、宗教哲学）が、個人の生が代替不可能な尊厳性を持ち、かつ人間は人格＝身体であり、コミュニケーション（「交わり」と「かかわり」）のなかで成り立つことから、介護を人格的行為とらえることが本質であると述べている。そして介護する者は、相手から人格性を呼び出し、人格たらしめ、人格性を維持させること、それを通じてみずからも人格となるコミュニケーション（コミュニケーションする人）であると論じている。

Chapter2『介護への散歩』では、小栗肇子氏（8介護福祉論）が、介護の現場経験から、人が生きるといふことや介護の意味を自らに根づかせておくことが大切であり、生きている実感、快い感覚を、利用者に感じてもらうこと、さらに、ADLに限定的に関わるだけでなく、介護が連続性をもった生き方へのサポートであり、チームケアが不可欠であると論じている。そのうえで日常生活全領域をサポートする知識と技術の直径・幅を大きくしていくことの大切さを指摘している。

Chapter3『介護の地域力』では、松田正巳氏（保健医療システム学）が、地域保健学の立場から、家族の介護力は、地域の支え（地域力）があって初めて長続きする。また、介護力と地域力は相互的であり、それを結びつける扇の要は、当時者性としての自己であると論じている。そして、中年期の発達課題として介護を考えておくこと、すなわち、地域の中に人との絆がある居心地のよい場所を確保し、仲間と夢を語り、セルフケアを通じて生活できる力を養うことの大切さを説いている。さらに、ケアを創造的に行えば発達課題を満たしつつ自己が癒されると述べ、新たな健康観（スピリチュアル・ヘルス）への取り組みを提唱している。

Chapter4『「貧しい者」の権利』では、佐柳文男氏（キリスト教倫理学、宗教社会学）が、宗教が社会体制を維持させるために権力と結んで病や障害を持つ者をマージナライズし、偏見を助長して、自立する力を奪ってきた面と、偏見を是正し、マージナライズされた人々を共同体のうちに復権させ、自立する力を与える面があることを明らかにしている。そして、法律や制度の改革は、人々の意識や価値観が変わらなければ目的を達成しないが、それは至難の業であり、宗教の領域に属するプロセスでもあると論じている。

Chapter5『仏教思想にみる介護』では、佐藤雅彦氏（仏教学・生命倫理）が、ブッタの思想と介護の関わりを自己と他者の関係性において述べている。自他の隔たりを超えた布施行として、「財施」「法施（無財の七施）」「無畏施」をとりあげ、介護の場面で重なり合う項目としている。さらに、「箭喻経」を紹介し、介護の概念規定や理論などの、さまざまな枠組みなどにしばられることなく、ただ目の前にその行為を必要とする人がいるからこそ行為を行うのだという、自然に湧き出ずる気持ちを大切にすべきことを説いている。

Chapter6『語り合う身体』では、八木洋一氏（宗教哲学）が、言語を操る自我レベルを基本に据えたコミュニケーション概念の狭さとそこからくる息苦しさからこの概念を解放するため、生命の根源的働きの実現として生命活動をコミュニケーションととらえ、場所論的コミュニケーション論の観点から、身体の一時的としての語り合う身体という視座を取り出している。そのうえで、ケアという人間の働きを人間存在の基本機制から、次元、基軸、位相のアンサンブルとして明らかにしようとしている。

Chapter7『ケア概念の国際化』では、牛津信忠氏（社会福祉学）が、ケア概念の国際的広がりやケア施策のもつ意義を述べている。また、ケアリング・ワールドへの道に密度が与えられるためには、絶えず、ケアの狭義の意味における現実が人間の個人としての価値および人間の関係性における相互主体化の現状把握と向上のプロセス、その方途の妥当性を基底から問い続けていく思索が大切であることを論じている。

Chapter8『ケアの新しい地平のために』では、本田里恵氏（介護支援専門員）が、歯科衛生士の立場から、口腔ケアが人間にとって生きるための根底的なケアそのものであり、それは全人生に通奏底音のごとく流れ続け、生きることを支えていることを明らかにしている。そして、口腔は人が世界とのコミュニケーションする窓口であり、生活の要として口腔ケアは介護の質をよく表すものの一つであると論じている。

Chapter9『老いと介護』では、増田樹郎氏（社会福祉学）が、過去の介護状況を整理したうえで、介護の目標は、障害部位（患部）に対するケアではなく、そのことによって失った生活機能であり、たとえどのような障害があろうとも、彼がどのような生活スタイルを望んでいるか、つまり活動や参加を望んでいるかということこそがニーズの本来の趣旨であり、アクティビティを保障する介護を実現するために介護

観の転換が必要であることを指摘している。

本書の論点は多岐にわたっており、評者にとって消化しきれない内容の論文もあるが、介護を家族のあり方あるいは専門性のあり方としてではなく、生命の根源的営みを支え合う「いのちの対話」として語り伝えたいという編者のねらいは、各論文の基底に一貫して流れていると思われた。どのような読者を想定しているのかにもよるが論文の配列の工夫や総説として介護の拠って立つ足場を考える「方法論」について論及があれば、より読者の理解が深まるのではないだろうか。

評者は、北米で発展したソーシャルワークをお手本にした社会福祉援助技術が日本の社会福祉現場において発展するためには、身体と向き合う介護福祉実践との統合化を検討する必要があるのではないかと考えている。本書に触発され、執筆者と介護あるいは援助するということについて語り合いたいという思いに駆られた。

ともすれば、介護が安易な倫理主義に陥ったり、技術としてマニュアル化したりする今日、介護福祉士の養成に携わる教員、あるいは介護現場の中で自らの実践が壁にぶつかったとき、是非手にとって読んで頂きたいと思う。